

「ウーマン・イン・モーション」 ヴィオラ・デイヴィス

2022年5月19日

エリザベス・ワグマイスター

ケリングの「ウーマン・イン・モーション」トークへようこそ。バラエティ誌のチーフ・コレスポンデント、エリザベス・ワグマイスターです。第75回カンヌ国際映画祭でこのプログラムのキックオフを迎えることができ、大変嬉しく思っています。

今日は唯一無二の存在であるヴィオラ・デイヴィスという素晴らしいゲストをお招きしています。

もちろん、『フェンス』、『ダウト～あるカトリック学校で～』、『ヘルプ』、『殺人を無罪にする方法』など、数々の受賞作でご存知の方も多いことでしょう。ヴィオラ・デイヴィスは、アカデミー史上最もノミネートされた黒人女性であり、世界で最も荣誉ある俳優の一人です。

ケリングの「ウーマン・イン・モーション」トークは、映画界だけでなく、映画界を超えた女性の功績を称えるものです。ケリングのプログラムは、社会における、そして同社会の枠組みにはまらない女性の前進を称えます。

ヴィオラ・デイヴィス以上のゲストは考えられません。それでは、はじめましょう。

エリザベス・ワグマイスター

ヴィオラさん、あなたは素晴らしいキャリアをお持ちです。先ほど紹介の中で、私はいくつもの実績を挙げました。多くの受賞歴や作品についてお話しましたが、ひとつだけ紹介しきれなかったのは、あなたの履歴書に「作家」が加わったことです。ヴィオラさんは、ちょうど回顧録を出版されたところですね。ご自身にとって、執筆作業とはどのようなものだったのでしょうか？

ヴィオラ・デイヴィス

プロセスは、とてもカタルシスを感じるものでした。この本を書き始めたのは、パンデミックの最中で、自分自身の存在意義について問いかけてしまう、実存的な意味の危機を迎えていると感じていた時期でした。その頃、ブラック・ライブズ・マターが起こりました、そしてもちろんコロナがありました。LGBTQ コミュニティは自分たちの権利を求めて闘い、非常に争いの多い選挙がありました。そして突然、私は隣の人を違った目で見えるようになり、白人を違った目で見えるようになりました。もちろん、まわりの人は私を前と違ったように見ることはなかったと思います。私の目は否定的でも肯定的でもなく、ただ、ある意味、より"目覚め"たということです。

そして、すべてのことについて、つながりについて疑問を感じたり、自分がやっていることに疑問を感じたりするようになりました。実存的な危機に陥ったときはいつも、リセットボタンを押すときだと私は考えます。携帯電話の調子が悪いとき、電源を切るように言われるでしょう？そしてまた電源を入れる。私はそれを実行したまでです。私は本の中で、はじめてに立ち戻り、少女の頃のヴィオラになりました。

エリザベス・ワグマイスター

本では、ご自身の幼い時のことが書かれています。とてもそのままに、つまり正直で、ためらいなく自分の子供時代や生い立ちについて書かれていますね。生い立ちが、今のあなたにどのような影響を与えたのでしょうか？

ヴィオラ・デイヴィス

そうですね。生い立ちのおかげで私はファイターであり、サバイバーになりました。過去や子供時代にトラウマがあり、そして結局のところ私は白人の多いコミュニティで育ったので、可愛がられたり、自分が可愛いと感ずることもありませんでした。でも、そうした気持ちにも負けずに、私は動き続けました。アン・ラモットの言葉を口ずさみ続けました。「勇気とは、祈りを捧げた恐怖である」。

私は自分に恐れがあること、不安があること、自己不信があることをよく理解しています。だからといって、そうしたものが、私が肉体的にも精神的にも動き続けることを止めることはないのです。

目標があることや前進することが、恐怖がないということではありません。そして、素晴らしい人生には、失敗や心の傷、トラウマがないとも思いません。そのすべてが人生という旅の一部なのではないでしょうか。本当にそう思いますし、大変なことも人生にはたくさん起こります。

でも、そんな中でも確実に言えるのは、自分にはそれだけの価値があると感じたということです。地平線の向こう側にきっと何かあるような気がしました。地平線上にあるオズの国があると。そして、ヴィオラはそのオズの国にふさわしい、と。

エリザベス・ワグマイスター

困難な時も自分自身を信じて、それに価値を見出し、いつかもっと大きな何かを成し遂げるんだ、という自分に対する信念とはどこからきているものなのでしょうか。

ヴィオラ・デイヴィス

どうやってできるのかは私にもまったく分かりません。きっと自分の人生が終わったとき、私の信じる神様に会ったら、すべてを説明してくれるはずですよ。なぜ私の人生にああした信念を与えてくれたのかと。

私が知っているのは、そういった信念が私にはある、というただそれだけのことです。DNA 検査と同じようにです。自分の中で何が起きているかなんて誰も分かりませんよね。そして、DNA の結果を手に入れたら、え？うそでしょ？ってなるみたいに。

でも、私をもっとよく知っていることは、何度も心が折れてしまうことがあるということです。そして、それは本当に心が折れてしまうのです。特に、人生を生きていたら、心が折れることはつきものですよ。そして、どん底に落ちて、傷ついたときに、選択肢があります。もがき苦しむ、そこに留まるか、それとも人生とは何かを示す光を感じるか、という選択肢です。

この間、ある番組を見ていたんです。ある男性が家に戻る途中で、ちょっとした悲劇が起こりました。彼の娘に何かがあって、車で帰ることになったんです。彼は悲しみに暮れていました。でも、車を走らせているときに、観察していました。彼の目にはすべてがはっきりと見えました。道に生えている木も鳥も水もです。

本当に突然、毎日通っている道なのに、まったく違う視界で見ているような、X 線を通して見ているような感じですか。

そして、たとえ人生で何回も心が折れても、このようなことが起こるのです。のちに人生に感謝するようになるのです。例えば、私はおいしい食事に感謝しています。冷蔵庫が満杯なのもありがたい。清潔なシーツに感謝しています。家具屋にいて新しいベッドを買うのも感謝しています。そうだ、石鹸と水もありがたいですね。私には無かったものですから。これが、私の人生から得たものだと思います。他の人が当たり前のように持っているものに感謝する、ということです。

エリザベス・ワグマイスター

そうですね。心が折れることについてのお話がありましたが、そうした瞬間すらも自分次第では、最高のものに変えることができるということですが、演技をするにあたって、この業界全体は、「No」という言葉をよく耳にする業界です。

ヴィオラ・デイヴィス

色んな言葉をたくさん耳にする仕事だと思いますが(笑)

エリザベス・ワグマイスター

そうですね。確かに色んな言葉をたくさん聞きますね。例えばですが、オーディションを受けた後にとか、役柄にぴったりはまらないと思われた時などに、特に「ノー」という言葉を耳にしたいと思います。ご自身の記憶の中で、キャリアにおいて傷ついたり、拒否された後に、それでもそれをポジティブに捉えたり、そこから成長できたりなどしたご経験は何かありますか。

ヴィオラ・デイヴィス

そうですね。過去を振り返ってそういう瞬間をいくつか挙げることはできますが、ポジティブな面を見つけるには時間がかかりますね。

エリザベス・ワグマイスター

はい。

ヴィオラ・デイヴィス

なぜなら、それはどうやって人生を切り開くか、誰が何と言おうと、誰もがこの世を去る時に、この世で生きた証を残したい気持ちがあると思います。そのためにはどうすればいいのでしょうか？正直にそして大胆に言えば、私は演技でそれを実現します。

私の人生には、夫と娘と母親と妹がいます。私の人生にとって大きな意味をもつものですが、仕事も人生にとって本当に大切なものです。

つまり、作品とは非常に重要であり、自分が実現した証、そしてレガシーの一部なのです。

だからどのような形でも拒絶されると傷つくし、「見た目が役不足」と言われると、すごく腹が立ちます。心が傷つけられましたし、腹立たしい気持ちでした。理由はたくさんあります。その多くは人種に起因しています。正直に言うと、もし私が同じ顔立ちで、肌の色が 5 トーン明るかったら、また少し違ったでしょう。もし私がブロンドの髪、青い目、そして鼻筋が通っていたら、今とは少し違っていたでしょうね。カラリズム(肌の色の濃淡で差別をすること)についても話すこともできるし、人種についても話すこともできます。本当に腹立たしいですし、私はそれで傷ついてきました。具体的には言いませんが、数多くのプロジェクトでそうした

ことがあり、どのように対処したかは先ほどお話したとおりです。「勇気とは、祈りを捧げた恐怖である」という言葉のとおりです。

『ヘルプ～心がつなぐストーリー』に出演し、オスカーにノミネートされました。それでおしまい、と私は思っていました。で、次はなんだろう、と。でも結局同じような役ばかりまわってきました。モデル体型ではない黒人の女性をどうやって彼らはキャスティングするのか？という話です。そして、3日間ここにおいて、2日間あそこにおいて、2日間あそこにおいて...と私はどん底に落ちていました。

そうすると、もう私ができるのは、自分の価値を認めてもらえるような、そして唯一自分の怒りを和らげる方法として残っていたのは、自分で役を見つけてくるということでした。それが私の対処法でした。

言葉が悪いですが.....「クソ食らえ」でしたね。そして、その怒りには価値がありました。うまくそこに置かれた"fuck it"には価値があったんです。なぜなら、あのとき、あの爆発が、変化の一瞬を表しているように感じたからです。その瞬間から、もう二度と同じことはできない。純粹な、抑えのきかない怒りというのは、精神的に病んだ怒りではなく、健康的な怒りなんです。健康的な怒りというのは、何と言っているか...ムーブメントを巻き起こすものなんです。

そうになったら、もう満足してはいけません。その怒りをどうにかしないとダメです。もう二度と後戻りしたくないのですから。私がLAに移ってから、主役になるのを断られたことが何度もあります。私の見た目のせいで、です。そのことに本当に腹が立ち、それで夫とジュヴィ・プロダクション(JuVee Productions)を立ち上げたんです。

世間では夫婦だけで始めたらいい、と言われました。何もなくていい、自分のやりたいようにやればいい、それが私の考えていたことでした。これが、私が拒否された経験に対する私がとった対処法です。漠然とした答えですが。

エリザベス・ワグマイスター

素晴らしい回答でした。ありがとうございます。

今お話しいただいたことで興味深いのは、あなたはこの作品『ヘルプ～心がつなぐストーリー』でアカデミー賞にノミネートされましたね。でも実はどん底の瞬間だった。アカデミーを獲ったから、どんな役でも選び放題だし、どこでなにを発言したって大丈夫、と思われていた。でも実際はそうではなかった。

ヴィオラ・デイヴィス

そうです。でもこれはどんなことにも当てはまることだと思います。人間関係でも、子どもをもつのも、結婚でも同じです。木曜の晩にABCで放送する番組のラインナップと同じことです。なぜなら、それは『ア・フュー・グッドメン』のジャック・ニコルソンの有名なセリフ「おまえには真実は分からん！」みたいなものだからです。

人はオスカーを見たい、きれいなドレスを着た人たちを見たい、と思い、そして、その人たちが賞を獲ったら、「彼女が獲った！ ついに受賞！」。そして、彼らがステージから歩いていくのを見て、自分が望む彼らの人生を想像するんです。ビジョンボードは、人々が自分の人生のビジョンや、自分がどこに行きたいということをボードに書き込むのですが、このビジョンボードでの目的地には現実が伴うことを知りません。そこにある現実には実は大したものではないのです。

つまりハリウッドでの現実とは、どこに役があるのか？ということなのです。

誰かがステージから降りたとき、その人を見るといいでしょう。男性なのか女性なのか。若いのか、それとも年配なのか。黒人なのか白人なのか。

そして、彼らがステージから降りたら、レッドボックスでもネットフリックスでもどこでもいいですから、作られたすべての映画を見て、そこで展開されているすべての役柄と物語を見てください。そのオスカーを獲ってステージから降りたばかりの人に似た人が出てくるか？もし、その映画にそのような人々が出演しているとしたら、彼らが演じているのはどのような役柄なのかを見ることです。

何の役で出ているか、何の作品を生み出しているか、何を奨励しているかによって、その人のキャリアがどのように進んでいくかがわかります。

もし疑問があるのなら、もっと深く考えてみましょう。あなたはどんな映画をお金を払って観に行きますか？

そうやって深く考えてみたら、「オスカーを獲ったからあなたはもう大丈夫ね、あ、何か後で食べに行かない？」と言うような幻想の世界から抜け出して、先に進んで行けるのだと思います。

オスカーを獲ったのだから、ヒスパニック系で、色黒で、もう何でもありだ、と思うのではなく、黒人やヒスパニックの女性が主役の映画を最後に見たのはいつだろう、もしくは観たいと思わないのか、と考えることです。いや、マーベルの映画を観に行こう。あの人が素敵だから、マーベルを観たい、とか、彼女がとてもかわいいので彼と一緒にいたいなどなど....

問題がわかりましたね。そして、自分がその問題の一部であることにも気づいたかと思います。

私たちは、ステージに上がり、マイクを持って、「もっとチャンスを与えるべきだ！」と叫ぶだけではだめなのです。その周辺にいる人たちと一緒に、私たちの望む世界を作り出すために、物語を語ることを奨励する必要があります。

私たちは、自分たちが望むような世界を作るために、どのような役割を担っているのかを理解しなければなりません。そして、それが文化のあらゆる側面に波及していくのです。

でも今は、役割に対してある種の抵抗感がありますね。それは、私たちがこれまでずっとハリウッドを、映画製作やマリリン・モンローやジョーン・クロフォードのような存在として見てきたからかもしれません。しかし今、私たちは違う人生を歩んでいて、人々が自分たちの居場所のために闘っています。いまやジョーン・クロフォードの代わりに、シャニークア・ワトキンスやガルセル・ロドリゲスがいるのです。

もしストーリーテリングの幅がもっと広げれば、物語の語られ方が違っていたら、私はここに座っているだけで、私と年代ではあるけれども私とは似ていない人たちと同じような映画のキャリアを持つことができるかもしれませんね。でも、それはまた別の機会にお話しましょう。

でも、それが毎朝、ベッドから出るきっかけになっているんだと思います。自分の元の姿に戻るとすると。それは、6歳や8歳のヴィオラが感じていた私の怒りです。自分を除け者にするような世界から逃げていた。私はそう感じていました。少年たち、そして文化が自分のことを醜い黒人のニガーと呼んでいる、と。私を突き動かしたのは、自分の人生から抜け出したいということでした。でもそれと同時に、私は怒りの中で、もうこれ以上ヴィオラを吐き出さないような人生を作ろうと思ったのです。ただ吐き出しても、あなたには何もない、ローブもない、旅もない、あなたは残り物なんだと言い聞かせるのです。

だから、夫と私はジュヴィ・プロダクションを設立したんです。

エリザベス・ワグマイスター

ジュヴィ・プロダクションについてお聞きしたいと思います。他の人へ多くの機会を生み出していますよね。

ヴィオラ・デイヴィス

そうですね。

エリザベス・ワグマイスター

他の人にも。また、黒人女性であるションダ・ライムズが作った『殺人を無罪にする方法』が居場所を作り出していることも興味深いことだと思います。

ジュヴィ・プロダクションで行っている仕事や『殺人を無罪にする方法』などで見られるようなこれまでにない役柄を通して、どういった変化を実感していますか？

ヴィオラ・デイヴィス

はい。いえ、いつも私は「はい」と答えてしまっていますが、本当は分からないのです。本当です。私が部屋に入って、ヴィオラ・デイヴィスだ、とまわりに言われても、「誰のこと？」と思ってしまいます。

「はい」ではなく、これからは「そう願っています」と言うようにしたいと思います。でも、『殺人を無罪にする方法』が終わった頃は、配信サービスできえも、テレビで肌の黒い女性の主役を見ることは少なかった。

だから、もう一度言いますが、それはイデオロギーや信念、メンタリティに関わることなんです。そして、抽象的な話です。

なぜ肌の黒い女性を採用しないのですか？彼女が部屋に入ってきて、あなたを驚かせたとしたら、彼女のために居場所と物語を作り、彼女が成功したときに、その状況にもかかわらず成功したのではなく、その状況だからこそ成功したのだと言えるでしょう。

でも、配信サービスには 400 もの番組がありますから、もっとたくさんあるのでしょうか。それはわかります。ですが、想像力を膨らませるようなストーリーテリングという点では、まだ実現されていません。ある種のジャンルやストーリーを実現するには、プロデューサーとして、そのストーリーのために本当に闘わなければならないこともあるのです。

例えば、低所得者層が住む厳しい地域に住む息子を持つ母親を私が演じたいと思えば、その息子はギャングのメンバーで車上荒らしで死んでしまうのですが、そうしたストーリーを作ることは可能です。

でも、もし私が、ニースに飛んで、56 歳で 5 人の男と寝て、私のような姿になって、自分自身をやり直そうとする女性を演じたいとしたら、その役を押し通すのは難しいでしょう。ヴィオラ・デイヴィスとしてできえもです。なぜなら、人々は精神的な目覚めや人間性と肌の黒さを同時に考えることができないからです。

要素が多すぎるのです。「私のメイド、ルーズ！」みたいなことです。というのも、実際に「ルーズ！」とディレクターに言われたことがあります。10 年くらいの付き合いなのに、ディレクターに「ルーズ」と呼ばれたんです。そしたら、それは彼のメイドの名前がルーズだからだと後でわかりました。だから、今もそれは変わっていません。

エリザベス・ワグマイスター

それは、あなたがすでにヴィオラ・デイヴィスとしても有名な名になっている最近のことでしょうか？それとも、もっと前のことですか？いつだったらいいというわけではありませんが、気になるのは、撮影現場で、映画界以外でも、そうしたことがたくさん起きているのを見聞きするからです。もちろん誰のことかを明かせとは言いませんが、あなたのキャリアのどの瞬間にそういうことがあったのでしょうか？

ヴィオラ・デイヴィス

それはですね...いつでしょうか。私のキャリアの最初の頃でした。私のキャリアももう長くなります。30 歳くらいのおときですから、ずいぶん前のことですね。

でも、そういうマイクロアグレッション(何気ない日常の中で行われる言動に現れる偏見や差別に基づく見下しや侮辱、否定的な態度)は常に起きていることなのです。

しかし、ストーリーテリングという観点からあなたの質問に答えると、私はいつも、2 人の子供を部屋に入れ、1 人にクレヨン、鉛筆、キャンバスを渡し、真っ白な壁のような部屋に入れ、「夢中になって、何か描いてみて」と伝えるのです。そしてもう一人の子には鉛筆も何も与えず、「じっとしていて」と言い、席に座って何もしないように伝えます。一方には、できるようにすべての道具を与え、もう一方には、何も与えない。でも、同じ結果を期待している。

それが、私の持っている感覚です。自分がアーティストで、何かを作りたい、爆発するようなものを世に送り出したいと思っているのに、それを実現するための道具がない、あるいは道具にアクセスできない、だから、怒らずに何とかしなければならぬ。それが私たちの現状です。大胆に言えばです。

エリザベス・ワグマイスター

正直に話していただき、そして正直に話せる立場にあることを、とてもうれしく思います。そして、あなたには本当に...

ヴィオラ・デイヴィス

いえいえ。

エリザベス・ワグマイスター

本当にそう思います。あなたには、正直に話す勇気があります。多くの人はそうではありませんから。

そろそろ観客からの質問の時間ということですが、もうひとつだけお聞きしたいことがあります。部屋に入る際に「ヴィオラ・デイヴィスよ」と人が話しているのを耳にすると、「それって誰のこと？」と思うというお話でした。

でも、今家にいる小さな女の子たちは、あなたを尊敬し、あなたが成長する過程で見えなかったものを今見えています。最新のシリーズでは、ミシェル・オバマを演じましたね。多くの少女たちは、黒人初の大統領、黒人初の大統領夫人を目にすることができました。そのことや作品について、あまり多くを語れないのは承知しています。オバマ夫人とどのような会話を交わしたかもお聞きしません。

ですがあの時、自分の国で初の黒人のファーストレディ、初の黒人の大統領を迎えたことは、ご自身にとってどういった意味があったのでしょうか？

ヴィオラ・デイヴィス

希望。すべて、です。自分を肯定する言葉、「あなたは何にでもなれるわよ」「何でもできる」「自分は美しい」と知っているでしょう。誰がそんなこと言ったの？」といった言葉をかけられて育っても、自分に似ていて、美しいと周りから言われている人の例を見ることがない、という事実をまず理解してください。

それが、肌の黒い女性の大きな特徴なんです。「そんなの気にしてはだめ、肌の黒い女性だって美しいのよ、ヴィオラ！」みたいな感じです。でも、何もイメージとなるモデルがいらない。そして、部屋に入ると、人は

自分がそうしていることをあまり知りません。私は有名だから、みんな私のことを見ますが、もし私が誰なのか分からないと、面白いほど誰も私を気にしません。でも、私は見られていると感じるのです。

だから、若い黒人の女の子に対しても、このことを本当に徹底的に意識して、いつも「あなたには価値がある」「あなたは美しい」と伝えています。これは、生き抜くことを生み出す源であり、自己愛を生み出す源であり、糞みたいな肺で息をし続けることの源なんです。みんな、お金や容姿、失敗の度合いで自分の価値を決めてしまうけれど、そんなことはない。私はみんなにも、娘にも言います。「たとえあなたが失敗しても私は気にしないし、あなたにはまだ価値がある。そのために物々交換をしたり、何かをしたりする必要はない。体重が一定でなくてもいいし、何もしなくてもいいの。あなたにはそれだけの価値があるのだから」。

そしてそれは、世の中のあらゆるものの物理的な姿を見ることで得られるものなのです。

エリザベス・ワグマイスター

この世界には、ヴィオラ・デイヴィスが何人か必要ですね。でも、彼らは存在するのです。ただ、居場所と機会が与えられれば。でも、あなたの発言、行動、すべてに感謝します。この後は、観客からの質問に数分お答えいただきたいと思います。マイクが回ってくると思います。

記者

これまで多くのキャリアの中で、怒れる黒人女性という図式で捉えられがちな役を数多くこなし、実際には代わりに、強い黒人女性のもつ繊細さや成功、弱さなど、さまざまな側面を表現してきましたね。

これは、キャリアを通じて、あるいはキャリアの最初のころに、こうしたナラティブを変えたいと意識してのことでしょうか。

ヴィオラ・デイヴィス

いい質問ですね。ありがとうございます。役者として役に入り込むと、演じる役を人間らしくしたいと思うのは当然だと思います。ただ怒っているだけという人間はいません。アネリー・キーティングにしても、ただ怒っているわけではなく、柔らかさがあります。彼女は確かに怒っていましたが、その怒りの中にある弱さを見せたかったのです。色気とはまた違う話です。つまり、写真ではない演技の世界では、人間らしさが私を夢中にさせるのです。人間味を出そうとすると、自然とそうになってしまうんです。もう一度言いますが、これは幼い頃の私の怒りです。私はどこかに閉じ込められているような気がします。小さなヴィオラはいつも、「私が誰だかわかる？」「私が見える？」と聞いてきます。

なぜなら、本当にいつもそういう質問をされるんです。「どうやって役を選んでいるの？」とか「なぜ怒らない役を選ばないのか」とか「もっと可愛い役をやらないの？」とかそういった質問です。

ソーシャルメディアが、俳優であることの定義を弓なりにしてしまっていることを、人々は理解しなければいけません。ほとんどの俳優には選択肢がないのです。もう一度繰り返し言います。ほとんどの俳優には選択肢がないのです。

そんなことを言う俳優がいたら、それは嘘です。ほら、女性が「私は代謝が速いから、パンも食べられるし、夜中にデザートも食べられる」と言うのと同じことです。彼らは嘘をついていますね。

あなたはそこに座って、「あのね、アクション映画に出たいの！」と言うわけではありません。25歳だろうが何歳だろうが、エージェントに電話して「次の役はアクション映画に決まりね。トム・クルーズと出演したいの」とは言わないでしょう。

私の場合、本にも書いていますが、選択肢がありませんでした。まったくです。だから、自分の持っているもので何とかしなくてはいけなかった。人間味を出すために演技力を駆使して立体的なキャラクターを作り上げました。アントワーン・フィッシャーも、1日だけの仕事でしたが、ストーリーに入り込んで、少なくとも「彼女がコカインを吸う以上のことが起きているんだ」と思ってもらえるようにしました。

エリザベス・ワグマイスター

もう一つ質問があるようです。

記者

おはようございます。ご自身の作品は、レガシーとして永遠に生き続けると思いますが、人々の記憶に何を残したいですか。また、好奇心で聞くのですが、何でもできて、何でも成し遂げることができるように見えますが、逆に不得意なことはありますか？

ヴィオラ・デイヴィス

そう言っていたきありがとうございます。私の11歳の子供にも言ってやってください。昨夜私が宿題をさせようとしたときに。

私はただ、人々が孤独でないと感じてほしいのです。この1年、いやもう2,3年でしょうか、パンデミックによって、誰もが精神的な問題を感じ、それが露呈しました。

その多くは……いや、その多くが何であるかは言いませんが、ただただ心を寄せています。一般的に、人と接するとき、孤独で孤立していると感じることは本当につらいことだと思います。自分が感じていること、考えていること、やっていることすべてが、自分をほとんど怪物にしてしまうようなもので、つながる方法がないんです。今の時代、人とつながるのはとても難しいのです。そして、お伝えしましょう。自分自身とつながることもまた難しいのです。

だから、人々が孤独を感じないようにするために何かできることがあるとすれば、それは、あなたが「私なんか価値がない」と感じる瞬間です。自分には価値がない。A、B、Cをやっているから、私の人生は価値がないんだ、と感じる瞬間があります。でも、AもBもCも何も悪いことではないということを私は伝えたいのです。生きていることの証明になる。私はそれでいいと思っています。私はそうします。そして、私の生き方に感動したという声をたくさんいただきます。それは私にとって大きな意味があります。それを達成できたなら、上出来だと思えます。たとえ、あと1つ賞が獲れなくても、それでいいと思えます。

エリザベス・ワグマイスター

ソーシャルメディア上でもたくさんの質問を頂いています。もう時間があまりないのですが、1つだけご紹介します。インスタグラムで、アレクサンドラが質問を寄せてくれました。「あなたのことを見ている世界中の少女たちにメッセージを送るとしたら？」

ヴィオラ・デイヴィス

先ほどお話したような気がしますが。

エリザベス・ワグマイスター

そうですね、お話の中で触れていただいたと思いますが、一問一答の形でしっかりお答えできればと思います。ソーシャルメディアでこの質問が多かったので。

ヴィオラ・デイヴィス

自分は価値ある存在だ、というメッセージを伝えたいです。

そして、価値ある存在になるために何かをする必要はない、と。容姿や出身地など関係ありません。あなたにはただ価値があるのです。

でも、世間があなたにレッテルを貼らないように、できる限りのことをしてください。レッテルを貼られないように最善を尽くしましょう。私は、世界が自分自身を攻撃してきた、と感じることもありました。世間はいろいろなことを言いますが、そうすると、自分の中にある子どもの心を忘れてしまうんです。でも、それを追い求めようとするエネルギーがどこかにあって、そのエネルギーが自分に大きな喜びをもたらしてくれたのです。

そうすると、自分を信じることができるようになりました。娘に「ジェネシス、今日はすごくかわいいね！」と言うと、娘は「うん。知ってる。そうでしょ？」と答えます。私は小さな子が、「知ってる。そうでしょ？」と言うとき可愛くて大好きです。

あなたは美しいのです。そして、できる限り、過剰なまでに自信を持つこと。自分を愛してあげてください。そして、グレナン・ドイルが言うように、「他人を失望させるか、自分を失望させるか、それがあなたの仕事なら、毎回(他人を)失望させるほうを選びなさい」です。実際、人生におけるあなたの仕事とは、できるだけ多くの人を失望させて、自分自身を満足させることなのです。私はまわりの人に、そして特に小さな女の子たちにこう伝えたいです。

エリザベス・ワグマイスター

どうもありがとうございます。皆さんありがとうございました。

[拍手]